

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04555

研究課題名(和文) 大学入試における主体性の評価に関する国際比較研究

研究課題名(英文) International comparative study related to the evaluation method for college admissions

研究代表者

永田 純一 (NAGATA, JUNICHI)

広島大学・高大接続・入学センター・准教授

研究者番号：70330959

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：大学入試における主体性評価の方法と内容について、主に米国、英国そして日本の3か国における国際比較のための現地調査を実施し分析を行った。専門教育が主に学部でなされる英国と日本では、大学入試(学部)では教科学力を重視し、大学院課程において専門化がより強化される米国では、大学入試(学部)においては、高等学校までの活動歴が重視される傾向があることが示された。ただし、合格倍率の違い(難易度)によってその度合いや非学力要素の内容が異なることが明らかになった。大学入学後の主体性育成の明確な方向付けが入試における主体性評価方法の確定に重要であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学入試において主体性等の非学力要素をどのように評価し、活用するかは極めて重要な課題である。本研究では、諸外国の21世紀スキルを意識した中等教育カリキュラム開発に着目し、さらに、諸外国の大学入学者選抜における利用方法や評価方法の国際比較を行うことで、我が国の入試改革への大きな示唆を得ることができると期待される。

研究成果の概要(英文)：Regarding the method for evaluating the applicant's characteristics of the independence in college admissions, we conducted field survey for international comparison mainly in the United States, United Kingdom and Japan. In the United Kingdom and Japan, where specialized education is mainly conducted in undergraduate schools, the academic ability is emphasized in college admissions (undergraduate). In the United States, where the specialization is further strengthened in graduate programs, it was shown that there is a tendency that the activity history at high school were more important. On the other hand, it became clear that the degree and contents of non-academic ability differ depending on the difference in the selectivity. It was shown that a clear direction how to develop the characteristic of independence at college education is important for determining the way of evaluating applicants' characteristic of the independence in the college admissions.

研究分野：教育社会学

キーワード：大学入試 主体性 国際比較

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国の大学入試においては、現在多くの場合、教科学力を重視した方法がとられている。一方、過去を振り返れば、教科学力の筆記試験のみではなく、高等学校の調査書、あるいは適性試験等を重視した時代もあった。そのような中、平成20年12月に中央教育審議会から『学士課程教育の構築に向けて(答申)』が出され、大学入試における調査書等を活用した多様な選抜方法や、大学教育における初年次教育等による主体性育成の重要性が指摘された。さらに、平成28年3月には、『高大接続システム改革会議「最終報告」』により、これからの時代に身に付けるべき力として、「学力の3要素」が定義された。これらは、十分な知識・技能、それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度、である。

一方、諸外国においても「21世紀型スキルの開発」としてすでに取り組みがなされており、大学入学者の選抜方法にも変化がみられる。この場合、大学入学者選抜を含めた高大接続システムとしては、大きく分けると次の2つのパターン：(A) 中等教育の終了時に外部試験を含めた大学入学資格試験を実施、(B) 高校・大学とは別機関による外部試験を実施、に大別できる。英国、国際バカロレア資格は(A)、米国は(B)、日本は(B)の一部に含まれると考えられる。さらに、高等学校の活動については、パターン(B)では、学校の評価と外部試験の評価は別であるが、パターン(A)では、学校内評価と外部試験評価を総合して評価点が与えられる。ここで、パターン(A)では、学校内評価の中に生徒の主体的な取り組みを評価する項目が含まれていることから、その評価点を見ることで自然に大学入試に主体性評価が組み込まれることになる。一方、パターン(B)では、外部試験の他に高校での活動資料や面接等において主体性の評価を行うことから、独立の資料を用いることになる。

このように、国によって高大接続システムが異なり、さらに大学入学者選抜に利用する資料が異なっていることから、我が国の大学入試改革を検討する場合、諸外国における「21世紀型スキルの開発」との関係においてどのような入試が実施されているのかを明らかにし、その上で我が国の「学力の3要素」による大学入試改革の内容を検討することが極めて重要であると考えられる。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、本研究の目的は、我が国の大学入試改革における「学力の3要素」をどのように評価するか、とくに、3番目の「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の評価方法を検討し、最適な手法を見出すことにある。そのため、諸外国の中等教育と高等教育、そしてその接続システムとしての大学入学者選抜について、国際比較を行うことで、大学入試改革に資する知見を得たいと考える。

ここで、大学入学者選抜において、中等教育における学校内評価を活用しているパターン(A)では、各教科ごとの分析が必要であり、その大学教育への接続性も重要である。一方、パターン(B)の場合、各教科の接続性と入試における評価観点は、受け入れる大学側が多くを判断することになり、その判断を担っている組織のあり様も重要な分析の対象である。

3. 研究の方法

- (1) 中等教育と高等教育(大学)とのカリキュラム接続(alignment)の検証
 - ・米国、国際バカロレア、GCE A Level 等における高等教育へのカリキュラム接続を確認するため、科目の内容及び履修学年等を確認
- (2) 大学のアドミッション部門への現地調査
 - ・米国、英国等の大学におけるアドミッション部門を訪問しインタビュー調査を実施(半構造化面接)
- (3) 中等教育(高校)の現地調査
 - ・米国、英国等における高校を訪問し、教員及び生徒にインタビュー調査を実施(半構造化面接)
- (4) 大学入学者選抜における利用資料の調査等
 - ・各国の大学における入学者選抜に利用する資料、入試において重視する内容、入試実施担当組織の配置等に関する調査

【1年目】

- ・米国ハワイ州における公立高校と州立大学のカリキュラムについて調査を実施する。その後、現地調査を実施。対象者は大学アドミッション関係者(教員、職員)、高等学校教員。
- ・米国、英国、の高校教育、国際バカロレア課程におけるカリキュラムの調査(評価方法、学習内容等)
- ・米国の大学における入学者選抜資料の調査

【2年目】

- ・米国カリフォルニア州における州立大学と私立高校のカリキュラムについて調査を実施する。その後、現地調査を実施。対象者は大学アドミッション関係者(職員)、高等学校教員。
- ・米国の大学における入学者選抜資料の調査

【3年目】

- ・米国で開催される国際会議に参加し、これまでに得られた成果をもとに海外の研究者と意見交換
- ・英国における高等学校カリキュラム(GCE A Level)の調査
- ・英国の大学及び高校を対象とした現地調査
- ・研究成果の総括

4. 研究成果

(1) 高等学校における評価方法の国際比較

「21世紀型スキルの開発」の観点から、各国のカリキュラムでは、探求型の教科学習及び教科横断型の学びが増加していることが示された。ここで、その評価方法は、各学校の教員による評価に加え、その評価結果をさらに上位の評価者がレビューする階層的な評価システムを取る場合も見られている。特にイギリス連邦諸国(英国、オーストラリア)、国際バカロレアディプロマ課程がそのようであった。しかし、英国では、やや探求型の学びに対する評価の割合が減少傾向にあり、現在カリキュラム改革が進行している。

(2) 米国のK16(P20)等の幼児教育から高等教育までの接続性を見据えた連携

現在米国では、多くの州において、幼児教育から高等教育までの教育接続を見据えた連携システムが活発に活動している。今回調査したハワイ州とカリフォルニア州でも同様の動きが見られた。ハワイ州では、P-20 partnership とよばれるシステムがあり、高大接続については、早期に大学を体験するプログラムや大学の授業を実際に履修して単位取得するプログラム等が活発に行われていた。さらにAP(Advanced Placement)を含めて、これらのデータは州内でデータベース化され、各高校別の大学進学者数、SAT・APのスコア、大学授業科目の早期履修率等について州政府はきめ細かくデータを収集し、一部をインターネット上で広く公開している。カリフォルニア州でも高等学校と州立大学とのカリキュラム接続を重視した科目配置がなされ、大学入学時に求められる教科の種類と成績が明示され、大学側は入学者選抜時に細かにこれらのデータを選抜資料として扱っている。

(3) 大学のアドミッション部門担当者及び高校教員へのインタビュー調査結果

米国での調査ではっきりしたのは、第1段階の選抜は明らかに高等学校時の成績を用いる、ということであった。ただし、各州によって学ぶ内容、範囲が異なることから、アドミッション部門は、自身の判断基準となる様々なデータを事前に広範囲に収集し、独自の計算式等を用いて評価を行っていた。ただし、その計算式自体は、他大学のアドミッション関係者に限定して情報共有を行っていた。そのような状況であることから、統一した指標として利用可能なSAT/ACT, AP, あるいはIBDPのスコアが、より信頼性の高い指標として利用可能と認識されていた。このような学力把握をベースとして、その上で主体性評価(あるいは非学力要素: nonacademic skill)がなされていた。また、学力と非学力要素の入学者選抜における重みづけは、大学の入学難易度(selectivity)によって、大きく違いがみられた。志願者の8割以上が合格する大学等では、あまり非学力要素は重視されずむしろ学力のスコアのみで合否を判定する傾向にある。一方、2割程度の合格率の大学では、ボランティア経験や課外活動を重視していた。

一方、英国の大学においては、中等教育の統一カリキュラムであるGCE A Levelカリキュラムが実施されていることから、いずれの大学を受験する場合もこのA Levelのスコアが必要になる。入学者選抜において、面接は必須ではないが、医師養成コースでは面接が課されていた。調査した大学では、質問ごとに異なる面接官が待つテーブルが8または10程度設置され、全体で60分以上かけて面接が実施されており、非常に面接が重視されていた。

高等学校を調査した結果からは、米国および英国のいずれにおいても、主体性の育成のための特別なプログラムを用意しているということではなく、高等学校以前からさまざまな場面で生徒みずから選択をする場面が数多くあり、その時々で主体的な選択を求められることから、大学へ進学する時点で十分に主体的な態度を有するのではないかと、という回答が多くあった。大学進学後は、選択の幅が大きい米国とそれほど大きくない英国とで違いがみられるが、高校教員からの回答は類似していた。しかし、主体的な選択が難しい生徒も存在すると考えられることから、そのような生徒に対してどのような指導がなされているかについて、今後調査する必要があると考えられる。

3力年の本研究の結果から、学力の3要素の一つである「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関係する能力・スキルを入学者選抜で評価する方法は、諸外国では多様な形態があることが示された。また、その選抜方法は、中等教育と大学入学後の教育システムとに深く関わっていた。以上のことから、我が国の入試改革においては、大学教育でどのような主体性の育成を図るか、その明確な方向付けが主体性の評価方法の検討に極めて重要である。今後、本研究で得られた成果をもとに、大学教育において求められる主体性の育成とは何か、そしてそのことを踏まえた入試方法を開発することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 永田純一・杉原敏彦・三好登	4. 巻 30
2. 論文標題 米国の高校教育と大学入試における主体性の評価について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 228-233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田純一・杉原敏彦・高地秀明	4. 巻 29
2. 論文標題 米国における高大接続を見据えたカリキュラム改革 ハワイ州を事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 141-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永田純一・杉原敏彦・高地秀明	4. 巻 28
2. 論文標題 高等学校における評価を活用した大学入学者選抜の国際比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 75-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Noboru Miyoshi, Junichi Nagata, Toshihiko Sugihara
2. 発表標題 A Comparative study on the importance of non-academic factors for university admissions in the United States and Japan
3. 学会等名 CIES(Comparative International Education Society) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 永田純一・杉原敏彦・三好登
2. 発表標題 米国の高校教育と大学入試における主体性の評価について
3. 学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 永田純一・杉原敏彦・高地秀明
2. 発表標題 米国における高大接続を見据えたカリキュラム改革 ハワイ州を事例に
3. 学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 永田純一・杉原敏彦・高地秀明
2. 発表標題 高等学校における評価を活用した大学入学者選抜の国際比較
3. 学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	杉原 敏彦 (Sugihara Toshihiko) (00379851)	広島大学・高大接続・入学センター・教授 (15401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高地 秀明 (Kochi Hideaki) (70403508)	広島大学・入学センター・教授 (15401)	
研究分担者	三好 登 (Miyoshi Noboru) (40735164)	広島大学・高大接続・入学センター・特任准教授 (15401)	